

# 平城太上天皇の変（薬子の変） と唐に渡った高岳親王

## 目次

### I はじめに

### II 平城太上天皇の変（薬子の変）

1. 時代背景と事件
2. 平城天皇の病
3. 平城天皇の政治
4. 首謀者の薬子と仲成
5. 嵯峨天皇の動きとその後
6. 嵯峨天皇の宣命
7. 変の主な処罰者
8. 平城天皇の側近
9. 変が与えた影響
10. 平城天皇関連年譜

### III 唐に渡った高岳親王

1. 皇太子高岳親王
2. 僧侶になった親王
3. 親王ゆかりの寺
4. 東大寺大仏開眼供養
5. 渡唐の願い
6. 入唐
7. 西天竺（インド）を目指す
8. 親王と虎害伝説
9. 羅越国の場所
10. 高岳親王関連年譜

### IV おわりに

#### I はじめに

桓武天皇により平安京へ遷都して十数年後、大同 5 年（810）9 月に平城上皇が平城京に都を戻すことを企て、実行寸前となる事件が起こった。この事件を引き起こしたとされているのが藤原薬子である。

『日本後紀』には薬子の主な罪状として「平城京遷都を推し進めたこと」とあるが、それは長岡京遷都を推進した父・藤原種継の功績を否定することにならないか。事件は本当に薬子のせいで起こったのか、史書『続日本紀』『日本後紀』の中で事件に関する部分を読み直し、調べることにした。

また権力争いに巻き込まれ、廢太子となった高岳親王にはどのような運命が待っていたのか、親王が仏門に入った後、仏教界において最高位に立ったにもかかわらず、なぜ入唐と渡天の道を選んだのかを探っていきたい。

## II 平城太上天皇の変（薬子の変）

### 1. 時代背景と事件

延暦25年（806）に桓武天皇が亡くなると、安殿親王（平城天皇）が即位する。平城天皇は役所の統廃合や行政改革を実行したが、病のため僅か3年余りで同母弟の神野親王（嵯峨天皇）に譲位した。しかし退位しても権力は維持され、平城上皇が平城京へ移った後も寵愛する藤原薬子やその兄藤原仲成が権勢をふるい、政界の混乱が起こったのである。

平城京の平城上皇と平安京の嵯峨天皇の両立による二所朝廷の状況から、藤原薬子とその兄藤原仲成のふたりが平城上皇復位を目的に平城京遷都を図ったとされる。 [資料1・2・3]

### 2. 平城天皇の病

平城天皇は即位して、わずか3年で皇太弟神野親王に位を譲った。もともと天皇は風病（ノイローゼ）に悩まされており、一種のうつ病で不安定な精神状態であった。この風病は伊予親王事件によりさらに悪化する。伊予親王が謀反を企んでいるとの密訴があり、これを信じた平城天皇は伊予親王とその母吉子を大和国川原寺に閉じ込め、飲食を与えなかった。このため二人は服毒自殺したとされる。しかし伊予親王は無実で、謀反はでっち上げだった可能性が高い。やがて平城天皇は持病を悪化させ、神野親王に譲位することにしたのである。

ところが譲位後、上皇の健康はにわかに回復して国政への関心を示し、上皇の命令として政令を出した。側近である薬子や兄の仲成も政治舞台への未練を捨てきれず、ついに上皇に重祚するよう促した。

### 3. 平城天皇の政治

藤原緒嗣（藤原百川の長男）らの意見を取り入れ、地方の情勢から民意をくみ取るための使者を派遣し、地方政治改革の重要な契機とした。太政官の参議を觀察使として各地方へ派遣し、その報告を受けて地方政治の改革に取り組んだ。

下級官吏の待遇を改善、官庁の機構を整理・統合して行政組織は効率化し、財政支出は大幅に抑制された。

#### 觀察使

大同元年（806）設置。令外官のひとつで、東山道を除く6道に各1名置き、その下にはそれぞれ判官（じょう）1名、主典（さかん）1名を配した。当初觀察使は参議が兼任した。

大同2年（807）参議の号を廃止して觀察使のみを置き、畿内と東山道にも設置した。諸国の状況や国司・郡司の施設を觀察した。

觀察使は国司より優位であることから、地方行政は平城天皇の側近や重臣たちによって統治する構造が形成された。

また、平城天皇譲位後、觀察使は上皇の側近としての性格を有した。このため、嵯峨天皇も觀察使の食封（じきふ）を削減した上で国司を兼任させ、天皇指揮下の太政官へ格下げして対抗した結果、弘仁元年（810）年に平城上皇の詔勅により、参議が復活して觀察使が廃止された。觀察使職を解かれた者はそのまま参議になることが決まった。觀察使の定員8名が、そのまま参議の定員となる。

### 4. 首謀者の薬子と仲成

藤原四家のひとつ式家は藤原不比等の三男藤原宇合の子孫で、宇合が式部卿であったため、このよう

に呼ばれた。藤原四兄弟の死後、実権を握った橘諸兄に反旗を翻した藤原広嗣、称徳天皇の死後即位した光仁天皇を支えた藤原百川などの有力者を輩出し、奈良時代後期から平安時代初期には他家を凌ぐ勢いであった。

薬子と仲成の父・藤原種継《天平9年（737）—延暦4年（785）9月24日没》は光仁天皇の擁立に活躍した藤原式家の良継・百川の甥にあたり、良継らの没後式家のホープとして桓武天皇の絶大な信頼を得た。

天平神護2年（766）に従五位下を授けられ、美作守に任ぜられる。宝亀末年に左京大夫兼下総守に任ぜられ、天応元年（781）4月、桓武天皇の即位に伴い従四位上を加えられて、左衛士督兼近江守に転任した。

延暦2年（783）4月に従三位を授けられ、近江按察使兼式部卿を拝命する。延暦3年（784）正月に中納言となり、6月10日には造長岡宮使に任ぜられた。

種継は天皇の信任が非常に厚く、内外の事を全て決定した。都を長岡に遷すことも種継が中心となって建議したが、新都の造営はなかなか進まず、職人や人夫は夜を徹して工事をしていた。

延暦4年（785）8月24日、桓武天皇は娘の朝原内親王が斎王として伊勢に向かう事になったので、出立に立ち会うため平城京に行幸した。皇太子の早良親王と右大臣の藤原是公、中納言の種継らはそれぞれ長岡宮の留守官となった。

9月23日夜、種継は松明を照らして工事を促し検分していたところ、灯火の下で傷を受けて、翌日自邸で死亡した。時に49歳であった。天皇はその死を大変悼み惜しんで、詔して正一位・左大臣を贈った。『続日本紀』延暦4年（785）9月24日

種継の娘薬子《生年不詳—大同5年（810）9月12日没》は藤原縄主と結婚し三男二女を生んでいる。長女が安殿親王の後宮に入ったため、薬子も東宮宣旨（皇太子付の女官）として出仕した。ところが、精神状態が不安定だった安殿親王は薬子に頼ったのか、ふたりはいつのまにか男女の関係になってしまった。そのことを知った桓武天皇は激怒し、薬子の振る舞いが義に背くと考え宮中から追放した。しかし桓武天皇の没後、大同元年（806）安殿親王（平城天皇）が即位すると、薬子を再び召して尚侍に任じた。

種継の長男藤原仲成《天平宝字8年（764）—大同5年（810）9月11日没》は妹の薬子が平城天皇の寵愛を受けたこともあり権勢を誇ったが、陰険で専横な振る舞いが多く、伊予親王の変に関与したとされる。また父の種継暗殺事件のことが、『続日本紀』から排除されたことに怒り、その復活を願った。

『日本後紀』によると、仲成は生まれつき凶暴で心がねじれ、酒の勢いで行動することがあり、親族の序列に従わず、諫止する人を無視し、妹の薬子が朝廷で勝手な行動をするようになると、その威を借りて、ますます我儘な振る舞いをした。

多くの王族や高德者が辱められた。妻の叔母が、美人であるのを見て関心を寄せたが、馴染まないもので、力づくで自分の意を通そうとした。彼女が逃げ込んだ屋敷に上がり込んで、口汚くののしり、その上で強姦した。仲成が殺害されると、人々は「自らの行いが招いたことだ」と言った。

『日本後紀』弘仁元年九月戊申十一日条〔資料4.5〕

## 5. 嵯峨天皇の動きとその後

大同4年(809)、突然皇位を捨てた平城上皇は静養の地を求め、半年間に5ヶ所も転々と移りわたった後、12月に生まれ故郷の平城京に移り住むことにした。この間、嵯峨天皇も平城上皇のために官人を派遣して、宮地を調査させたが、平城上皇の意志に従い藤原仲成らを平城京に遣わし、宮室の造営にあたらせた。

ところが、平城京に落ち着いた平城上皇は健康も回復したためか、側近の公卿をはじめ、多数の官人を率いてしきりに朝廷の政治に介入し、政令を発した。

内侍司は薬子におさえられていたため、天皇側の奏上傳宣(勅旨を伝達)の機能は滞り、機密を保つことも困難になった。そこで天皇は蔵人所を創設し、天皇腹心の藤原冬嗣と巨勢野足を蔵人頭に任命した。

太上天皇が政務や人事に介入することは奈良時代以来珍しいことではなかったため、嵯峨天皇は対抗処置をとりつつも、表面は平城上皇の言動を尊重せざるをえなかったが、上皇が遷都を命じたため、天皇の忍耐も限度に達した。

嵯峨天皇は大同5年(810)9月6日、平城上皇の命を奉じて遷都に着手するよう見せかけて、腹心の坂上田村麻呂や藤原冬嗣らを造宮使に任命した。9月10日に至り、にわかに「遷都の事に縁り人心騒動す」という理由で、伊勢・近江・美濃の三国に使者を遣わし、国府並びに関を閉鎖し、畿内から東国に通ずる道を遮断した。一方、都では宮中を厳戒し、右兵衛督藤原仲成を捕えて、右兵衛府に監禁し、詔を発して薬子と仲成の罪状を告発し、薬子の官位を奪って宮外に追放し、仲成を佐渡権守に左遷することを布告した。(その後仲成は射殺。)

こうした一連の処置に激怒した平城上皇は9月11日早朝、宿衛の兵らに従え、薬子を伴って東国に入ろうとしたが、坂上田村麻呂に行く手を遮られた。平城上皇は翌日平城宮に引き返して出家し、薬子も毒薬を仰いで自殺した。

## 6. 嵯峨天皇の宣命

天皇が次のように詔した(宣命体)

天皇が仰せになる言葉を親王・諸王・諸臣・百官人等・天下の公民らみな承れ、と申し聞かせる。尚侍正三位藤原朝臣薬子は言葉に出して言うことも憚られる桓武天皇の時代に、春宮坊宣旨(東宮付の女官)として勤仕したが、天皇はその性格のよくないことを知り、宮中より退けられた。しかし、さまざまな手を尽くして、平城太上天皇に近づいて、太上天皇が嵯峨天皇へ皇位をお譲りになった大きな慈しみの気持ちを理解しないで勝手に権勢を振るおうとして、太上天皇のお言葉でないのにお言葉とし、意のままに人を讃めたりけなしたりして、何ものも恐れ憚ることのない仕儀であった。このようなことでさまざまな悪事をなしたのであるが、太上天皇に親しく仕えているので黙認してきた。しかしなお薬子は満足せず、太上天皇と朕とを二所朝廷などと言って隔てようとし、ついには大乱を起こそうとして、先帝桓武天皇が万代の宮と定めた平安京を停廃し、平城古京へ遷都することを申し出て天下を乱し、百姓(ひゃくせい)の疲弊をもたらした。また、その兄仲成は妹のよからぬところを教え正さず、かえってその勢いを頼んで、虚偽の事柄をもって、桓武天皇の親王・夫人(伊予親王母子)を侮り、家から追い出してさまざまな凌虐を行った。かかる犯罪は数えきれないほどあるが、法に照らし合わせれば罰すべきであるとは言え、思うところがあり罪を減じて、薬子は官位を解いて

宮中（みやのうち）より追放し、仲成は佐渡国権守として左遷するとの天皇のお言葉をみなの者よく聞け、と申し聞かせる。『日本後紀』弘仁元年九月丁未十日条

『日本後紀』によると、藤原薬子が常に上皇の帷（とぼり）のうちに侍し、何かにつけ詐わり託けることを行った。上皇は薬子を非常に寵愛し、その悪事に気付かなかった。薬子は平城京へ遷都を図ったが、これは上皇の本心ではなかった。『日本後紀』巻第17

変に勝利した嵯峨天皇は権威を確立し、皇太子高岳親王は廃され、皇太子には異母弟の大伴親王（淳和天皇）を立てた。変の処理では平城太上天皇にはおよぼさず、薬子と仲成に責めを負わせたのである。

## 『日本後紀』

嵯峨天皇が弘仁10年（819）に編纂を命じた。承久7年（840）完成。40巻のうち10巻が現存する。

『続日本紀』に続く六国史（日本書紀・続日本紀・日本後紀・続日本後紀・日本文徳天皇実録・日本三代実録）の第三にあたり、桓武天皇・平城天皇・嵯峨天皇・淳和天皇の治世、延暦11年（792）から天長10年（833）に至る42年間の記録を漢文の編年体でまとめたもの。内容は人物を痛烈に批判した伝記の記述に特色がある。編者は藤原緒嗣・藤原冬嗣・藤原貞嗣・良岑安世。

## 7. 変の主な処罰者

処罰者	官位・関係	処罰内容
平城天皇	太上天皇	出家
高岳親王	平城天皇第三皇子 皇太子	廃太子
阿保親王	平城天皇第一皇子	太宰権帥
藤原仲成（式家）	参議・従四位下	佐渡権守へ左遷ののち射殺
藤原薬子（式家）	尚侍・正三位	尚侍を解任ののち自殺
藤原安継（式家）	藤原仲成の叔父・従五位下	薩摩権守へ左遷
藤原貞本（式家）	藤原縄主の子・大蔵大輔・従五位下	飛騨権守へ左遷
藤原真夏（北家）	参議・正四位下	伊豆権守 備中権守へ左遷
多入鹿	参議・従四位下	讃岐権守へ左遷

## 8. 平城天皇の側近

藤原葛野麻呂（北家藤原小黒麻呂の長男）は上皇を諫言したため許される。薬子は葛野麻呂とも通じたとされる。

中納言藤原朝臣葛野麻呂は悪行の首魁（しゅかい）である藤原薬子と情交関係にあったので、罪は重いが、平城上皇を懇切に諫めたということで、処罰しないことにする。

『日本後紀』弘仁元年九月庚戌十三日条

藤原真夏（北家藤原内麻呂の長男）は参議を解任のうえ、伊豆権守のち備中権守に左遷された。変後も平城上皇に仕えている。弘仁13年（822）正月にようやく従三位に叙された。

文室綿麻呂（三諸大原の長男）は坂上田村麻呂の進言で昇進した。大納言の坂上田村麻呂が、平城上皇を迎え撃つために、美濃道に向かう際、武術に優れ辺境での戦闘経験が豊富な綿麻呂を同行させたいと上奏した。即座に綿麻呂に正四位を授けて参議に任じた。

『日本後紀』弘仁元年九月戊申十一日条

変後、綿麻呂は大蔵卿・陸奥出羽按察使を兼ね、東北地方に駐在し、蝦夷征伐の責任者を務めた。弘仁2年（811）征夷大將軍となる。

藤原真雄（北家藤原鷹取の子）は伊勢国に逃亡しようとする平城上皇を諫止した功績により、従四位下から正四位下に叙された。備前守に転任したが、弘仁2年（811）7月急死した。

藤原朝臣真雄は誰よりも身命を棄てて諫争したので、褒めて位を上げることにする。

『日本後紀』弘仁元年九月庚戌十三日条

## 9. 変が与えた影響

### 蔵人所の設置と検非違使

蔵人所は嵯峨天皇によって設置された令外官で、側近を蔵人として殿上に近侍させることにより、体制固めや情報の漏えいの阻止を行った。勅命の伝達・上奏の取次ぎをし、殿上人の指揮監督にあたった。この蔵人所の長官が蔵人頭で、天皇の側近として重要な任務を果たすようになった。嵯峨天皇は上皇勢力を押さえるため、蔵人頭を従来の尚侍の職の代わりに設けたのである。大同5年（810）に初代蔵人頭に藤原冬嗣と巨勢野足の二人が任命された。

検非違使は弘仁7年（816）にできた平安京の警察機能を担う令外官で治安維持と裁判の機能を兼ねており、天皇に直接上奏する特権を持っていた。

## 10. 平城天皇関連年譜

元号	西暦	年齢	出来事
宝亀5年	774	1歳	山部親王（桓武天皇）と藤原乙牟漏の間に安殿親王（平城天皇）が誕生
天応元年	781	8歳	第50代桓武天皇即位 早良親王立太子
延暦2年	783	10歳	乙牟漏を皇后とする。
延暦3年	784	11歳	6月10日 藤原種継らを造長岡宮使に任命する。 11月11日 長岡京遷都
延暦4年	785	12歳	9月24日 藤原種継が射られ死亡する。 桓武天皇、弟の皇太子早良親王を謀反の疑いで、長岡京の乙訓寺に幽閉する。 早良親王はさらに淡路島に流配の途上で、無実を訴えるため絶食し憤死する。 安殿親王が早良親王に代わり立太子
延暦5年	786	13歳	桓武天皇第2皇子神野親王（嵯峨天皇）誕生
延暦9年	790	17歳	乙牟漏皇后と祖母高野新笠（桓武天皇の母）死亡

延暦10年	791	18歳	桓武天皇、乙牟漏と高野新笠の死、安殿親王の発病を早良親王の祟りとして鎮魂の儀式を執り行う。
延暦11年	792	19歳	安殿親王病臥、早良親王の祟りとト占にでる。
延暦13年	794	21歳	10月22日 平安京遷都
延暦16年	797	24歳	平安京に遷都以来、桓武天皇の近親者が次々と死に天変地異が頻発する。 桓武天皇、早良親王の怨霊の祟りと信じ、霊に許しを乞い、怨霊の祭りを行う。
延暦19年	800	27歳	桓武天皇、早良親王に「崇道天皇」の称号を贈る。
延暦24年	805	32歳	桓武天皇、藤原緒嗣と菅野真道に天下徳政を相論させて平安京造営と蝦夷討伐を中止する。
延暦25年			
大同元年	806	33歳	3月17日 桓武天皇崩御、柏原陵（京都市伏見区桃山町）に葬られる。 5月18日 平城天皇即位 5月19日 神野親王（嵯峨天皇）立太子
大同2年	807	34歳	5月24日 参議を廃止して観察使を置く。 桓武天皇の第3皇子・伊予親王が、反逆者として母の藤原吉子と共に川原寺に幽閉され、飲食を絶ち自害する。伊予親王事件
大同4年	809	36歳	4月13日 平城天皇、病弱を理由に譲位し嵯峨天皇位即位 平城天皇は上皇となり、嵯峨天皇は翌14日、平城上皇の第三皇子・高岳親王を皇太子に立てる。 12月4日 平城上皇は平城京に移り住む。（大中臣清麻呂旧邸）
大同5年			
弘仁元年	810	37歳	9月6日 平城上皇は天皇に実権を渡さず、平城京への遷都を命じる。 嵯峨天皇が藤原冬嗣らを造平城宮使とする。 嵯峨天皇は平城上皇の側近を罷免し、軍を動かして東国への関を封鎖、上皇側の動きを制圧する。平城上皇は東大寺に入り出家し、謹慎する。 9月12日 首謀者とされる藤原薬子は大和に追われ服毒自殺する。 嵯峨天皇は藤原薬子の死亡の翌日、皇太子高岳親王を廃し皇弟・大伴親王を皇太子に立て年号を弘仁と改元する。 平城太上天皇の変
天長元年	824	51歳	7月7日 平城上皇は崩御、楊梅陵（奈良市佐紀町）に葬られる。

### Ⅲ 唐に渡った高岳親王

## 1. 皇太子高岳親王

高岳親王《延暦18年(799)－貞観7年(865)?》は平城天皇の第三皇子である。

大同4年(809)4月13日、平城天皇は皇太弟の神野親王(嵯峨天皇)に天皇の位を譲り、翌14日、高岳親王が皇太子に立てられる。親王は蹲踞太子(そんきょたいし)と呼ばれていた。

蹲踞(そんきょ)とは体を丸くしてしゃがむ、蹲るという意味で、親王は誰にでも頭を下げ、皇太子としての貫録に欠けていたか、高慢ではないため蹲踞太子と呼ばれていたのかも知れない。温厚で真面目な少年だったのだろう。嵯峨天皇の皇太子に立てられたが、翌年9月に起きた平城太上天皇の変で、皇太子を廃された。

大同5年・弘仁元年(810)12歳ですべての階位を剥奪され、平城太上天皇の変後12年間無階位の親王となるが、弘仁13年(822)1月7日に無品から四品に叙せられた。

## 伊勢継子

伊勢継子《宝亀3年(772)－弘仁3年(812)7月6日没》は平城天皇の妃。中臣伊勢老人の娘で、高岳親王・巨勢親王・上毛野内親王・石上内親王・大原内親王の母である。

親王が皇太子となった一ヵ月後の大同4年(809)5月18日に河内国にある内蔵寮の田地十一町を賜る。一身の後に寮田として没収されるという条件付きである。

平城太上天皇の変では責任を問われることなく、親王の生母として処遇されていた。弘仁2年4月、従四位下で山城国紀伊郡の田二町を賜る。翌年7月6日、41歳で卒去。従三位を追贈される。

## 2. 僧侶になった親王

高岳親王の仏法帰依は18歳と伝えられている。最初の師である富貴寺(奈良)の道詮(797－876)から三論空宗を受けた。道詮は聖徳太子を敬い、荒廃した法隆寺東院(上宮王院)の修復に尽力した人物である。

その後、東寺に入り空海のもとで密教を修めた。法名を真忠と号し、のちに真如と改め真如親王または真如法親王と称された。

真如親王は高野山に上り、空海に厚く師事し、阿闍梨の位を授かる。

高野山に親王院を開き、空海の十大弟子のひとりに数えられた。空海十大弟子は真済・真雅・実恵・道雄・円明・真如・杲隣・泰範・智泉・忠延である。

天長2年(825)に空海から胎藏、金剛の両部、阿闍梨位を授けられた。空海が亡くなったときには高弟として埋葬に立ち合い、仏教界を背負う存在となる。 [資料6]

## 3. 親王ゆかりの寺

不退寺(業平寺) 奈良市法蓮町にあり、平城上皇が譲位してのちに隠遁し「萱の御所」と称された。

超昇寺 奈良市佐紀町にあった廃寺で、平城天皇の揚梅陵に隣接していた。

高野山親王院 和歌山県高野山にあり、真如親王の創建と伝えられる。

金剛院 京都府舞鶴市にある寺院で、真如親王が高野山から弁財天を勧請したと伝わる。 [資料7]

## 4. 東大寺大仏開眼供養

斉衡2年（855）5月23日、突如奈良東大寺大仏の頭が落下した。当時大仏の頭が落ちるとい  
うのは大変な事件であった。文徳天皇よりその修理の役職として、真如親王に修理東大寺大仏  
検校の勅命が下る。

貞観2年（860）4月8日、東大寺大仏修復が完成し、清和天皇詔勅発布。「東大寺毘盧舎那  
大仏の事、惣じて修理大仏検校修業伝灯賢大法師真如に聴（ゆる）して処置せよ云々（東大寺大  
仏修理完成祝事については真如親王の師事に従い執り行うように云々）」

貞観3年（861）3月14日、勅命により真如親王は僧行事検校として総指揮にあたり、大  
仏慶讃会が盛大に執り行われた。

## 5. 渡唐の願い

「貞観三年（861）、上表して曰えらく、真如出家して以降（このかた）四十余年、三菩提を  
企て、一道場に在り。ひそかに以（おもん）みれば、菩提の道を求むるに、必ずしも一致せず。  
或いは住し或いは行じ、及ち禅じ及ち学す。而るに一事も未だ遂げざるに、余算ようやくおと  
ろえ、願う所は諸国の山林を跋涉（ぼっしょう）して斗藪（とそう）の勝跡（しょうじゃく）を  
渴迎せむと」

『扶桑略記』元慶五年十月十三日戊子条

大仏慶讃の翌日、「私（真如親王）は出家以来40年経ち余命もそう長くありません。諸国の山  
林を踏み越え、仏道修行の優れた古跡を訪れることを願い憧れております。」と天皇に願  
い出で、渡唐の請願を出す。しかし遣唐使船は23年前の第17次を最後に、派遣されてい  
なかったため、唐の商人李延孝に頼み、便乗させて貰おうとした。『頭陀親王入唐略記』

真如親王に従い入唐した伊勢興房が、貞観7年（865）に帰国した後記述した報告書で、  
真如親王の入唐と天竺渡航に関する根本史料である。最古の写本は京都・教王護国寺  
観智院（東寺）所蔵。

## 貞観三年三月、親王、入唐を許さる。

六月十九日、超昇寺（池辺院）より発し、南行して、巨勢寺に御宿す。別当僧平海、徒衆  
を率いて、まさに迎えんとす。平海は此れ親王の御弟子なり。親王、甚だ卑下し、僧徒  
の迎候を要めず。此の寺に経歴すること廿日なり。時に七大寺の長宿の和尚（わじょう）、  
朝夕、鳩集す。

七月十一日、巨勢寺より出でて、難波津を指す。名僧数十許（ばかり）人、逐い従  
いて相送る。大和国葛上郡の旧国府に到る。ここに親王、馬を駐めて僧徒に  
揖謝（いっしゃ）して云く、「これよりまさに却廻せらるべし」と。即ち僧徒、馬  
を下りて拜別す。皆な涙を垂れて云く、「僧、齢暮れに傾き、再展すること何日か」と。  
親王答えて云く、「彼れ此れ好在（つつがなきや）。縁に随いて相見ん」と。其の  
晩頭、難波津に到る。便（たより）に太宰貢綿船二隻を債り得る。

十三日、船二駕る。八月九日、太宰府鴻臚館に到着す。時に主船司の香山広貞、符に申す。

## 6. 入唐

貞観3年（861）3月、入唐することを許される。

6月19日、奈良・超昇寺を出発し、巨勢寺に20日滞在した。

7月11日、奈良を発ち、難波津に到着。

8月9日、船で瀬戸内海を西に向かい、大宰府に到着し鴻臚館に入る。

9月5日、壱岐島の斑島より、松浦郡柏島に向かう。

10月7日、唐の通事・張友信に外洋船の建造を依頼した。翌年7月中旬、張友信らと船に乗り、大宰府を出発。

従者は弟子の宗叡・安展・賢実等10名、伊勢興房等親王の母方伊勢一族等15名、舵取りの張友信・金文習・任仲元の唐人3名、船頭の高丘真今（たかおかのまいま）、建部福成（たけべのとみなり）と大鳥智丸の日本人2名、その他水手など総数60名。

貞観4年（862）8月19日 五島列島端の遠値嘉島に到着。

9月3日出帆。

9月7日、未の刻（午後2時頃）、明州の揚扇山に接近し、申の刻（午後4時頃）明州・石丹奥泊（現・杭州湾南岸）に到着。

9月13日、明州の望海鎮（浙江省寧波市鎮海）に上陸、12月に親王一行は明州から越州（浙江省）に向かうことが許された。

貞観5年（863）12月、越州で長安に入ることを認められた親王は宗叡・智聡・安展・禪念らを随行して江船（川船）に乗り長安を目指した。

貞観6年（864）留学僧の智聡に案内されて、長安城に到着した一行は西明寺に滞在した。この寺には留学僧円載が院を構え居住していた。この寺は長安で求法した日本人僧侶と関係が深く、かつては真如の師である空海も宿住していた。のちに円載は877年、帰国途中に難破して溺死している。

唐の皇帝懿宗（在位859～873）は親王の入唐求法の熱意を聞いて感嘆した。皇帝は青龍寺の法全阿闍梨に、親王が疑問としている仏教教義の難儀を解決するよう仰せになった。しかし半年が経過しても満足する回答は得られなかった。当時の長安はすでに仏教が衰退し、真如親王は空海のような優れた師に出会えなかったのである。〔資料8・9・10〕

## 7. 西天竺（インド）を目指す

親王は道詮に宛てた書状に「漢家の諸徳、多く論学に乏しく、意あるを歴問するも、我師（道詮）に及ぶ者なし云々（唐の高僧の多くは学を論ずる事に乏しく、仏典の教えを聞いても私の師である道詮師に及ぶ者なし云々）」とある。

10月中旬、真如親王は弟子の安展と円覚の二人と仕丁（召使い）の文部秋丸を率いて、長安の都を出発した。長安の青龍寺には親王の記帳記録がある。「身難没長海之西波、魂定帰故郷之本朝（たとえこの身は西の荒海に没せようとも、魂は必ず故郷日本に帰らん）」

一行は長安から中国大陸を馬や船、徒歩で南下し、12月に広州（広東）に到着した。

貞観7年（865）1月27日、寄付物品を持って合流するはずの伊勢興房の到着が遅れたため、真如親王は書き置きを残して、広州より南行する婆羅門船に乗り、西天竺（インド）を目指すた。

「今、興房を待てども、遠からず進発の期有りて、稽留（けいりゅう）すべからず。よって正月廿七日、安展、円覚、秋丸等を率いて西に向かうことに了（おわ）んぬ。すべからく赴き来ることを停（とど）め、早く李延孝の船に駕り、本国に帰るべし。」 『頭陀親王入唐略記』

出発には良期が必要であるから、このまま待つて好期を失いたくないと伝える。そこで宗叡と興房の二人は李延孝の船を求め、福州から順風をえて、わずか五日四夜の船旅で遠値嘉嶋（おちかのじま）に着いた。

同年6月、宗叡と伊勢興房は日本に帰国し、真如親王一行の西天竺（インド）渡航を朝廷に報告している。

## 8. 親王と虎害伝説

『閑居友』 鎌倉時代中期の仏教説話集 2巻 慶政著

真如親王、天竺に渡り給ふ事

昔、真如親王といふ人いまそかりけり。平城（なら）の御門の第三御子也。いまだ頭剃（かしらお）ろし給はぬ前（さき）には、高岳の親王とぞ申しける。飾りを落し給ひて後は道詮律師にあひて三論宗をきはめ、弘法大師にしたがひて真言をならひ給けり。

「法門、ともにおぼつかなきこと多し」とて、ついに唐土（もろこし）にぞ渡り給ける。宗叡僧正とともなひ給けるが、宗叡は「文殊の住み給ふ五臺山、拜まん」とて行き給ふ。親王はものならふべき師をたづね給けるほどに、昔この日本（やまと）の国の人にて円載和尚といひし人の、唐にとどまりたりけるが、親王の渡り給ふよしを聞きて、御門に奏したりければ、御門あはれみて、法味和尚といふ人に仰せつけられて、学問ありけれど、心にもかなはざりければ、つい天竺にぞ渡り給ひにける。  
中略

さて、やうやう進み行くほどに、ついに虎に行き遇ひて、むなしく命終わりぬとなん」

真如親王が広州からインドへ求法の旅に出かけ、虎に食われて死亡した話が伝えられているが、史実として扱えない。虎に食われたという説は仏教で、虎に食われて祇園精舎に飛んでいくという信仰があるからか。

元慶5年（881）10月13日、唐留学僧・中権（ちゅうかん）より申状（正式報告書）が到着した。「真如親王、先に震旦（中国）過ぎて、流沙（中国西北方の砂漠の古称）を渡らんとす。風聞、羅越国より到る。逆旅に遷化すと云々。（真如親王、先に震旦国を過ぎ流沙を渡ろうとされましたが、旅の途路、羅越国に於いて死去されたと聞き及びました。報告致します云々）」

『三代実録』元慶五年十月十三日戊子条

## 9. 羅越国の場所

当時、東南アジアには真臘国（カンボジアのクメール王国）・盤盤国（マレー半島中部）・師子国（スリランカ）・南詔国（北タイ・ミャンマー）・扶南国（タイ）・仏誓国（ジャワ・スマトラ島のスリヴィジャヤ王国）・アラカン国（ミャンマー南部からマレー半島北部）などがあり、現在のシンガポール付近には羅越国という海洋民族の小国があった。ここからベンガル湾に向かおうとしていたのではないだろうか。

1970年1月、マレー半島最南端ジョホール・バルの日本人墓地に、高野山親王院の僧侶が、すべての材料を日本から運び、真如親王供養塔を建立した。

## 10. 高岳親王関連年譜

元号	西暦	年齢	出来事
延暦18年	799	1歳	安殿親王と伊勢継子の第三皇子として誕生
大同3年	808	10歳	山城国久世郡の地六町が与えられる。
大同4年	809	11歳	4月14日 嵯峨天皇の皇太子に立てられる。
大同5年			
弘仁元年	810	12歳	9月13日 平城太上天皇の変で廃太子となる。 空海が嵯峨天皇の勅命により、東大寺の別当に任ぜられる。
弘仁3年	812	14歳	7月6日 伊勢継子死去
弘仁7年	816	18歳	結婚し、長男の在原善淵が誕生する。
弘仁13年	822	24歳	1月7日 12年間の謹慎を解かれ、四品の位を受ける。 この頃、空海に師事する。
弘仁14年	823	25歳	空海が真言密教の総師となり、東寺を与えられる。
天長元年	824	26歳	7月7日 平城上皇崩御（51歳）楊梅陵に葬られる。
天長2年	825	27歳	空海より灌頂を受ける。
承和2年	835	37歳	仁明天皇より平城京北郊に40余町を授受され、超昇寺と不退寺を建立する。 空海が入定、高野山にて四十九日法会を行う。
斉衡2年	855	57歳	5月23日 奈良東大寺大仏の頭部が突然落下し、文徳天皇より真如親王に修理東大寺大仏検校の勅命が下る。
貞観2年	860	62歳	東大寺大仏修復完成
貞観3年	861	63歳	3月14日 清和天皇の勅命により、僧行事検校として総指揮にあたり、東大寺大仏修理完成祝事を執り行う。 3月30日 従僧仕丁28人を伴い、西海道・南海道など国内諸国行脚に出立する。中国渡航請願の勅許を得る。 6月19日 超昇寺を出立し、20日間巨勢寺（現奈良県御所市）に滞在する。 7月11日 難波津到着 8月9日 船で瀬戸内海を西に向かい、九州大宰府に到着し鴻臚館に入る。 9月5日 壱岐島の斑島より、肥前国松浦郡柏島（無人島）に到着する。 10月7日 唐の通訳・張支信に外洋船の建造を依頼する。
貞観4年	862	64歳	5月 船が完成し、大宰府に戻り渡唐の準備をする。 7月中旬 弟子の宗叡・安展・賢実等10名と大宰府を出発 伊勢興房等15名、舵取り張支信・金文習・船頭の高丘真今、その他水夫など総勢60名が肥前の柏島より出航した。 8月19日 肥前五島列島端の遠値嘉島に到着

			<p>約半月間風を待つ。</p> <p>9月3日 順風がきて出発する。</p> <p>9月7日 午後4時に明州（現・杭州湾南岸）に到着</p> <p>9月13日 一行は唐官吏に入国要請を行う。</p> <p>12月 越州（現・紹興）に到着する。</p> <p>長安入京を要請する。</p>
貞観5年	863	65歳	<p>一緒にきた水夫たちを日本に帰国させ、入京許可を待つ。</p> <p>1年余りの間、仏教寺院を参拝してまわる。</p> <p>9月 入京許可が出る。</p> <p>12月 泗州の普光王寺に到着する。</p>
貞観6年	864	66歳	<p>2月 河南省開封に到着する。</p> <p>5月21日 陸路で洛陽を経て、長安（現・西安）に入京する。</p> <p>留唐僧の円載の案内で西明寺に入る。</p> <p>10月中旬、弟子の安展と円覚、仕丁の丈部秋丸を連れ、長安を出発した一行は中国大陸を南下し、12月に広州（広東）に到着する。</p> <p>当時中国はインド・アラビアとの交流があり、広州にはアラビアやインドの船がきていた。</p>
貞観7年	865	67歳	<p>1月27日 荷物を持って合流するはずの伊勢興房が遅れたため、待たずに広州より南行するインド船で出発する。真如親王は高僧・法全上人から受教するが、すでに唐の仏教は退廃していたため、仏法を見出すことができないと考え、天竺の渡航を決意した。</p> <p>これ以後、真如親王一行は消息不明、羅越国にて死亡と伝えられる。</p>

#### IV おわりに

嵯峨天皇は二所朝廷という危機に陥ったが、迅速に対応して勝利し、平安京を万代宮として位置づけた。また平城上皇に処罰が下されることなく、すべての罪を薬子と仲成に責任をおわせる形で収束をはかり、薬子は自殺、仲成が射殺されたことにより、藤原式家は一気に衰退した。

平城太上天皇の変後藤原式家は没落し、蔵人頭に任じられた北家の藤原冬嗣は天皇と姻戚関係を結び大きな権力を握った。

嵯峨天皇の時代は有力貴族が欠如したことや、橘嘉智子を皇后に迎え藤原氏の制約を受けなかったことで、天皇を中心に政治的安定がもたらされた。この時代には律令制を整備するため『弘仁格式』が藤原冬嗣らによって編纂され、勅撰漢詩集『凌雲集』『文華秀麗集』が編まれ、唐文化が隆盛を迎えた。

高岳親王が行方不明になった16年後、在唐の留学僧から親王が羅越国で死亡したという報告書が届いた。死亡時期は広州を出発した865年の暮れと推測される。親王が虎に食われたという伝説は後世のものである。死因も終焉の地も判らない。

権力争いに翻弄された高岳親王だが、人生の後半は東大寺大仏の再建を成し遂げ、自らの意志で唐

に渡り、さらに日本人として最初に天竺を目指したのである。

#### 参考文献

日本古代史紀行	恵美嘉樹	ウエッジ社
平安貴族	橋本義彦	平凡社選書
古代史を彩った人々	豊田有恒	講談社
続日本紀（下）全現代語訳	宇治谷孟	講談社学術文庫
日本後紀（中）全現代語訳	森田 悌	講談社学術文庫
大学の日本史（古代）	佐藤信編	山川出版社
高丘親王入唐記	佐伯有清	吉川弘文館
悲運の遣唐使 円載の数奇な生涯	佐伯有清	吉川弘文館
謎の皇太子をシンガポールに追え	葭原幸造	日地出版
高丘親王航海記	澁澤龍彦	文藝春秋社